

平成三十二年三月二十八日

各章の要点

一、発想について

・戦手中、沈黙を続けた大家の一人荷風の、戦後 返り咲き、
ジャーナリズムを賑わせてゐるか、荷風の作家的資質や藝術家
概念に於し、現代のふりにおいて 否定的とする動きが強まっ
てきた。

・近代日本文学の正統たる 自然主義的潮流・和小説作家の
系列に 位置づけられ得ぬ 荷風

逃避・敗北・理想喪失・思想の欠如・戯作者氣質
人間性の低俗

←
否定的にとらへられ、荷風文学の位置づけに
とまどふ 愛好家も多い

・恒存の態度

荷風の文学への愛着ゆえに、肯定する立場をとり、
荷風への反撥と愛着とを、矛盾なく包み含しうする様
に落着かせたいとする。

そして、この荷風論の目ざすところは、

荷風の文学を、近代日本文学の流れの中に、正しく
位置づけ、その文学を我々の遺産として受けとめること
にある、とした。

・荷風の文学の基調とは

・独自の情緒表現 ↓ 登場人物の心境そのものではなく、心境の
かもし出す情緒が主調となる。

←
・心境を風景に仮託しようとする表現方法を用いる。

・さらにこの風景描きとは、どこかの悲哀感情の表現となつてゐる。

←

この結果、非悲哀感情によつて包摂し得る、自然・生活・習俗（家具・調度・衣裳）に集中し、そこから風景として完成した構図や素材を切り取るという手法のため、マナリズムに陥る。

・荷風文学の基調となるものか、何故に生じてきたのか

・悲哀の情緒とは、いかなる内容のものか

・マナリズムにまで完成した風景とはいかなるものか

・文学の基調が情緒の上にあるとは、どんな意味か

←

これらを次々と次章以下で探究すること、否定的にとらへられかゝる荷風文学も、肯定し、転じようとする。さうして、否定的にとらへかゝる日本の土壌にも分析のメスを入れる。

二、「日本の近代」

・マナリズムにまで完成した風景とはいかなるものか

・人間と外部の風景との間に感情の交流が行なわれるためには、どうしても固定化した風景が必要。生活の中のこのくり返し、一定の風景に一定の情感を必然ちらしめる

←

風景の固定化（マナリズム）↓ 反応する情感の錬磨 ↓
完成し、洗練された生活様式を形成

←

この様式が、いさゝか、真の人間生活はあり得るものだ

近代日本の宿命

・一人二役を演ずることを強いられた明治日本、その物に両面における二重生活の間に、荷風ほど苦しんだ人は無かった。

・明治日本の権力の構図とは

③

〔強権・大ブルジョワ〕

ヨーロッパに對抗し、それと肩を並べんとした。ひたすら近代化の外観を整へようとした。

旧秩序を破壊した。彼ら田舎者には、経倫と構想をなすなかつた。

←

儒教精神を支へとし、内には反動勢力となり、外には帝国主義を押し出すことになつた。

〔民衆〕

①東京人の大部分

田舎者によつて生活秩序を破壊され退屈的となる。

②地方出身の現業ニ永

出せ主義・家族根性を發揮し、時代の波に乗る。

③農民

近代化の圈外で、旧來の生活様式のうちに眠りこけてゐる。

〔知識階級（民衆の中から出現）〕

ヨーロッパの近代機構と近代精神を理解してゐるが

明治日本の混沌たる状況では、近代自我確立のための

生活様式が整つてゐなかつた。さうな生産機構に

組み込まれることを潔しとしなかつたため、現象の問題をことごとく精神面・倫理面で解決しようとした。

・サ何風の立場

ヨーロッパの本質を見抜き、日本人の限界も知つてゐた

←

知識人・芸術家・日本の近代化に対する嘲罵の激しさ

荷風の目に、日本の知識階級は、出せしきねえ出せ主義者に見えなかつた。

封建の遺民たる無智なる民衆と、その片隅にひとり残された生活の上に傾斜してゐた。

三、生活の様式化

・「ふくむ物語」に荷風の作家の態度と藝術概念とを見る

・思想の欠如といふこと

思想の欠如といふことは、正体を見ぬいてゐる者の身の程を知らず、
思想の現実性と真実性について、逆説的に証明したもの

←

思想の欠如といふことは、正体を見ぬいてゐる者の身の程を知らず、
思想の現実性と真実性について、逆説的に証明したもの

←

自己の夢想の敗北と、觀念の場であることを示す、生活の敗北に
まで徹せしめた。

・生活の様式化といふこと

様式化せられた生活の姿、いかに思想の美辭麗句も
精神の目印も空しい層々楼々と映ひ

・荷風の文明批評は、思想的基準からなる、生活様式の
完全を欲する本能から出たことばなのだ。

・荷風の境地

・「フランスにおける様式美と替美」不幸な過渡期の病児

・「藝術的熱情」に過渡期に生きた詩人の非難と任務と
を見出し、生活の様式化に美を賭ける方向へ。

・自然主義の藝術概念といふことと対立し、

↓次頁へ

四、主張の藝術に對して

・趣味の藝術

・荷風の主張した情緒を基調とする「趣味の藝術」が暗示する
深さか、充分に検討されてこなかったのは遺憾

主張の藝術たる自然主義文学に触發され鍛鍊されてより本質的なる直下に達したものと云へる

封建的強權と道德への批判 反撥

↓武士と儒教倫理の罪を鳴らす

↓打首と虚栄とに汚れぬ官能の耽溺は、封建時代の庶民生活に見出されると意識しん

現実の暗面とそこに生きる人間の苦悶を知らぬける發をなさず
実は、固く生活の錘りを結びつけられてゐる

←

封建の世の暗さに根を置き、この暗い世界の裝飾とるる藝術であつた

虚る快樂肯定

↓荷風のエピソードに無心の快樂を肯定したといへる

悲哀の情緒

荷風の文学に見られる情緒の基調である 悲哀感

悲哀は美であり 美とは悲哀

↓真や善とは無縁の男や女が描かれた

悲哀の目取も深きもの↓人間存在の根本につきまといふものと感ぜられた

男女の人形化といふこと

日蔭の生活に純粹と完成と真実を發見

悲哀感の洗練されるに従つて、男女は人形と化してゆき、無自覚ふりと完成とも發揮する

自然主義文学の性格

精神の自由と尊厳とか、肉体を否定することを通してしか
生きへず、また理想もしなかつた ↓快樂否定

←
肉体の現實を否定してまで偉くさうとした

・醜悪な俗っぽい欲望にとはれてる自己をさうけ出すといふ「誠実」により、精神主義の面目を發揮しようとした

↓自己肯定・自己主張

← 修身克己の精神主義に 自己主張の不純な濁りが見えてくる

五 「救ひなき境地」

・荷風が見てゐる世界

・人間といふものが、詮じつめたところ、一個の人形としか映ひてくる。た
自然の自由も必然もない運命の舞台と、そこに踊らせる
人形の次女のみ表現する文だる

次第に非情が深化

近代人の繊細な心理の段を無視して外面行動の描写のみとなる

・終戦後發表された作品

性格の平面描寫 背景のナリヌイ
構成 筋書き 事件 すべてが常套になやりの様

・荷風日取後の境地

・三味線も背景もなしに素語りを演ずるといった
寂びかたの孤独と絶望・哀感する失はれてしまった
・非情のみで柔軟な主観の流露は失はれた

・僅達の能力

・荷風が立ち至った孤独は、僅達のかかひ知れぬ境地であり、
その上虚無に現代の名をもつて否定の鞭を加へる暴挙に似てゐる
みえはるわぬ

・今日の作品の冷淡と涸渇も「漫筆綺譚」「雨瀟瀟」の
格調を索引とするならば、それもまた境地の深化を見せて
くれてゐるものに他ならない。

・「作後贅言」末尾の「一節を暗唱する」として、それを味はひ
老婦人への礼を言ひつけてはゐるのだ

恒存の「この荷風論」は、女子大の夏期講座での講義を草稿としてゐる。対象が、文学を学ぶ学生や愛好家、研究者であり、恒存は初めに、この講義の目ざすところを明かにしてゐる。その目的は添って観点や作品を選んできるところに、腕の見せどころがあるわけだ。恒存自身は「冗漫修調」にあり、語り足りぬ気かしてゐる」としてあまり満足する出来映えではないと思つてゐるが、この作品もやはり恒存ならびは書けぬ面白さか、感じられん。それは、荷風といふ作家を評価しきれてゐない。近代日本文学界、研究者、評論家に、齒かゆさを感じてゐるならば、自らが荷風を愛し、肯定するゆゑんと、展開して見せたい点にある。荷風を否定する人達は結局、自らが陥つてゐる形式主義、精神主義に気づかぬかため、荷風の文学世界を受け入れ味はふことかひききない。受容者はあるといふ人も、思想が欠如してゐるとか人間観が低俗だとか評にひつかかり、自己の人間形成に資するところかあるいと気づいてゐる。その様子現状に、日本の近代の持つ宿命性、藝術と様式との関係の観点から、荷風の文学の価値を、新ためて認識させた手腕は、さすが恒存だと感心する。

では、恒存の「荷風論」で、面白く感じた点を述べてみよう。どこか近代日本文学の「遺産」と言へるのか、まず、荷風の西洋近代の毒を一身に受けてしまつたこと、思想といふものの正体を見抜いてゐたこと、そこから、近代日本の貧しさ、後進性を身にしみて理解し、そのやもつに苦悩したこと、それを表現した作品を我々へ遺してくれたこと、さらに、自然主義文学者に、自己主張の不純な濁りを感じ、自らは趣味の文学者に赴いたこと、生活様式の完全を欲する本能から、独得の様式美の世界を展開し、結果として、日本の伝統的美を継承し得たのにはなかつたか、荷風の非情は、人間と人形と化し、生活面の事象を無意味に並列する考証癖を發揮したりと、（見精神の不毛状態）と思はれるかもしれない。しかし恒存の目は、深いところを見てゐて、この様へ言うてゐる。「彼の刻々人形か思ひかけなく生き、生きとした人間味を發揮するのと同様に、強いて事物の意義を黙然とした荷風の風物描写は意外の現実性をもつてひとし迫る」

自然主義文学が、描き出した人間像・現実社会像と、荷風のそれとを比べてみた時、私は、江戸時代と明治以降の近代化した日本との断絶に抵抗し続け、連続せる美を追い求めた荷風の日本及び日本人の姿に、むしろ真実があると思はれる。荷風の文学の、我々の遺産たるゆゑに、ここにあげる。

この荷風論の末尾で、我々のとるべき、老練人に対する礼について述べてゐるが、ここにもいかに恒存らしい。「漫東綺譚」以後の荷風を認める批評家もゐる中、「東訪者」の冷淡と涸渇も、それもある。荷風の境地の深化を見せてくれるものにほかるる」とと評価してゐる。私においては、恒存の所期の目的は、確かに達せられたと言へる。立派な批評態度だと拍手を送る。

さて、荷風は今日、いかに評価されてゐるか、いや、読まれてゐるか。明治はあゝか戦前の文芸作品さへ、読むのが困難になる、としまつてゐる。荷風の文学に展開される風景、人間模様も、戦後全く失はれてしまつた。私は、恒存の評論の基調である、近代化論・人間論を索引として、荷風の文学を味はむ。日本人の生活から様式が失はれたことを痛切に感ずる。様式のないところに真の人間生活はあり得る、それは簡単に動物の生存にほかりません。とは、厳しい表現であり、今日の日本人の感ひてゐる閑寂感には、多くは、ここに起因すると思はれる。か、どうすれば良いか。私としては、さう恒存を讀み進め、教へてゐるふていくしかないのだと思つてゐる。